日本现代文学作家与作品

刘洪 主编

叶琳 副主编

日本现代文学作家与作品

刘洪 主编
叶琳 副主编

南京大学出版社
1995·南京

（苏）新登字 011 号

日本现代文学作家与作品
刘 洪 主 编
叶 琳 副主编
*
南京大学出版社出版
（南京大学校内 邮编：210093）
江苏省新华书店发行 南京前进印刷厂印刷
*
开本 850×1168 1/32 印张 11.75 字数 294 千
1995 年 11 月第 1 版 1995 年 11 月第 1 次印刷
印数 1—500
ISBN 7-305-02757-X/I·234
定价：16.00 元

《日本现代文学作家与作品》编写人员

顾　问：林青梧

主　编：刘　洪

副主编：叶　琳

编　者（按姓氏笔划为序）：

王奕红　叶　琳　刘　洪　陈　娟

审　校：刘宗和

序

南京大学の教壇に立つようになって三年を経ると、日語教育の色々な問題が、私にも迫ってきた。

テキストは、一応、長年使用してきたものがあるが、これもやや、時勢に遅れた感じがしてきて、私の場合は、日本の教科書会社にいる友人に協力して貰って、日本での新しいテキストの提供を受けてきた。しかし、これも私やもう一人の神奈川県派遣の教師が居る間に限ることで、いずれは南大日語科も、テキストをどうするかの問題に逢着することになる。この事情は、外国語学院においては、他学科も同様であり、どの学科でも、外国人教師に持ちかけられる問題であるようだ。

本来テキストは、日本でも日進月歩の時勢の前に、変遷を見る運命にある。要は、国情と時勢にあったテキストが、得られるか否かにある。

三年間の教育経験のうえでの、私の感想も幾つかある。

本来日本文学の起源は中国にあり、発祥を共にするのであるが、長い歴史の中で、日本は日本独自の発展経過をたどり、現在に至っているのが実情であり、さらに加わって、近年五十年のアメリカの影響もあって、今日、日本の文学状況は、中国とは全く異なった様相を見せているというのが、私の偽らざる心情である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そのような結果にある日中相互の文学が、ただ単に、テキストを手にするだけで理解し合えるであろうかというのが、今日中国の、日語日本文学教育の直面する重大な問題であろうと思われる。

一例を挙げると、梶井基次郎の「檸檬」である。これを私は四年生に教えたが、読後学生達は、口を揃えて、

「この作品は、一体何を訴えようとしているのでしょうか」とか、「全然何の意味か分かりません」

と私に問い掛けてきた。「檸檬」はご承知のとおり、日本の文学青年の間では、まさに神格的名作なのである。私は、日本で学生達にこの作品を語るとき、彼等と共に味わい、その世界にひたるだけでよかったのだ。

そのような日本近代文学の名作が、中国の学生に「全く理解ができない」となると、たとえそこに中国の国情があるとしても、私には、唖然たる当惑以外の何物でもなかったのである。また、田山花袋の「布団」など、そうなると、中国では批判の対象となるに違いないと思われ、事実そうであったようだ。

このような障壁が、中国では、教える方にも教わる方にもあるわけで、さらに中国で絶対な人気を得ている島崎藤村についても、彼の肉親の女性との情交を、中国ではどう説明しているのかという疑問を、かつて、中国のある日本文学研究家にたずねたことがあるが、明快な回答を得られなかった経験もある。そこで私は、中国での日本文学の研究方式は、中国側の選択に任せる以外にないと、考えるに至っていたのだった。

そんな時、劉洪さんから、日本文学についてのテキスト刊行の計画をきいたのである。その企画書を見せて貰って、私は警き、かつ安心した。選ばれた作家や作品は、誠に当を得たもので、花袋の「布団」もちゃんと入っている。文学研究上の問題を、

問題として留めておくのも、また、文学研究の重大なテーマであるはずである。この姿勢は大切なものと私は考えている。問題を排除することは、問題を失うことであるのを、忘れはならないであろう。我々日本人もまた、過去の、特に近代において、同様の問題を抱えているのである。

この企画には、南大日語科の若手教員が総力を挙げて参加し、真摯な研究姿勢を示している。学生達にさぞかし良い影響を及ぼすことであろう。

ここに選ばれた作家と作品は、日本文学が外国で学ばれる際に、明らかにその出発点となるものである。「やはり、ここからか」の思いに迫られざるを得なかった。今日、日本での文学作品への関心の、ある種の歪みを、逆照射されたような思いであった。私はこの計画に大賛成であり、喜んで協力を申し出た次第である。このテキストが刊行され、ここから、学生達は更に意欲を燃やして、日本文学の背後にある日本文化に、大きく目を開いてくれることを、心から願ってやまない次第である。

一九九四年三月一日

南京大学専家楼にて
林　青梧

目　录

序 …… 林青梧

现实主义文学

二叶亭四迷　浮雲…… 1

尾崎红叶　金色夜叉 …… 14

自然主义文学

田山花袋　布团 …… 29

岛崎藤村　破戒 …… 45

鸥外和漱石

森鸥外　舞姬 …… 58

夏目漱石　こころ …… 84

唯美主义文学

谷崎润一郎　刺青…… 113

白桦派文学

武者小路实笃　お目出たき人…… 125

志贺直哉　十一月三日午後の事…… 134

有岛武郎　生まれいずる悩み…… 145

新思潮派文学

芥川龙之介　羅生門…… 168

无产阶级文学

吐山嘉树　セメント樽の中の手紙 …… 179

小林多喜二　蟹工船…… 186

新感觉派文学

横光利一　赤い色…… 201

川端康成　雪国…… 211

新兴艺术派文学

井伏鱒二　黒い雨…… 220

社会派文学

石川达三　蒼氓…… 240

女流作家文学

佐多稻子　キャラメル工場から …… 251

有吉佐和子　地唄…… 268

战后派文学

野间宏　暗い絵…… 287

三岛由纪夫　金閣寺…… 299

无赖派作家文学

太宰治　走れメロス…… 308

战后社会派文学
水上勉　雁の寺…… 325

战后“私小说”
三浦哲郎　春は夜汽車の窓から…… 339

附录Ⅰ　日本现代文学史年表…… 348
附录Ⅱ　主要文学流派简介…… 359

参考文献…… 364
后　　记…… 365

现实主义文学

【作家介绍】

二叶亭四迷（1864—1909），小说家、翻译家。本名长谷川辰之助，别号冷冷亭杏雨。生于东京，曾移居名古屋、岛根县松江等地。他五岁时适逢“明治维新”爆发，青少年时期是在“开化革新”的气氛中度过的。当时，沙皇俄国正逐步向亚洲各国扩张。他立志成为一名军人，但三次报考陆军士官学校都告失败。1881年，他进入东京外语学校俄语部学习，在校期间大量阅读了俄国优秀作家的作品，对俄国文学产生了浓厚的兴趣，俄国的现实主义文学强烈地感染了他，这对他尔后的人生观和文艺观的形成产生了重大影响。他于1886年退学。退学后不久，拜访了坪内逍遥，两人从此开始了终生之交。在坪内逍遥的劝说下，他于1886年在《中央学术杂志》上发表文学评论《小说总论》，在日本提倡现实主义的创作方法，同时进行小说《浮云》的创作。1887年，他的处女作《浮云》第一篇署名坪内逍遥，出版了单行本。该小说出版后，获得了文坛的好评，被视为日本现代小说的先驱，他也因此名声大震。1888年，《浮云》第二篇刊出。1889年《浮云》第三篇出版后，他成为内阁官报局的雇员。在此期间，他翻译了屠格涅夫、果戈里等人的作品。由于俄国势力的步步逼进，他于1902

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

年来到我国，任清政府京师警务学堂的事务长。日俄战争暴发后，他任《大阪朝日新闻》东京派驻员。战争结束后，又从事俄国政治情况的研究。1906年，他重返阔别近20年的日本文坛，在《东京朝日》上发表《其面影》。翌年，又发表最后一篇长篇小说《平凡》。这两部作品均赢得读者的好评。日本文坛欢迎他的复归，文学杂志纷纷登载他的翻译谈话。然而，他此时关注的焦点仍然是国际问题。1908年，他作为《朝日新闻》特派员赴俄国首都彼得堡，意欲以新闻记者的身份为战后日俄两国的相互理解贡献自己的力量。由于神经衰弱、肺结核等病症的折磨，于1909年病逝于归国途中，享年四十六岁。

二叶亭四迷的《小说总论》和坪内逍遥的《小说神髓》点燃了革新旧文学的烽火，但它又突破了《小说神髓》的局限，第一次使用了“现实主义”一词。他的处女作《浮云》成为日本现代文学史上第一部现实主义小说，生动地描写了肩负时代命运的知识分子的苦恼，开创了清新流畅的“言文一致”的新文体，这部作品给日本现代文学的创作和发展以极大影响，从而使二叶亭四迷成为日本现代文学的先驱者之一。

浮　雲

【作品梗概】

长篇小说。内海文三是一个青年官员，寄居在叔父园田孙兵卫家中。文三和叔父的女儿阿势之间产生了爱情。叔母阿政原来对这门婚事是持赞同态度的，然而当文三被革职后，她硬是拆散了这对年轻人，而将女儿许配给文三的同事，善于逢迎的本田升。阿势也为本田升的殷情和甜言蜜语所倾倒。文三陷入了失恋的痛苦之中。

第三回　よほど風変な恋の初峯入　下

今年の仲の夏、ある一夜、文三が散歩より帰ッてみれば、叔母のお政は夕暮より所用あッて出たまままだ帰宅せず、下女のお鍋も入湯にでも参ッたものか、これも留守、ただお勢の子舎にのみ光明が射している。文三初は何心なく二階の梯子段を二段三段登ッたが、ふと立止まり、何かしきりに考えながら、一段降りてまた立止まり、また考えてまた降りる……にわかに気を取りなおして、まさにふたたび二階へ登らんとする時、たちまちお勢の子舎のうちに声がして

「どなた」

トいう。

「私」

ト返答をして文三は肩を縮める。

「オヤどなたかと思ッたら文さん……淋しくッてならないからちっとおはなしにいらッしゃいな」

「エ多謝う、だがもうちっと後にしましょう」

「何か御用があるの」

「イヤ何も用はないが……」

「それじゃアいいじゃアありませんか、ネーいらッしゃいヨ」

文三はすてし躊躇て梯子段を降りはてお勢の子舎の入口まで参りは参ッたが、うちへとては立入らず、ただ鵠立でいる。

「おはいんなさいな」

「エ、エー……」

ト言ッたまま文三はなお鵠立でモジモジしている、何かはいりたくもありはいりたくもなしといったような容子。

「なぜあなた、今夜に限ッてそう遠慮なさるの」

「でもあなたお一人ッきりじゃア……なんだか……」
「オヤマアあなたにも似合わない……アノいつか、気が弱くッちゃア主義の実行はとうていおぼつかないとおっしゃッたのはどなただッけ」
ト①蠑の首を斜に傾しげて嫣然片頬に含んだお勢の微笑に釣られて、文三は部屋へはいりこみ坐につきながら
「そう言われちゃア一言もないが、しかし……」
「ちっとお遣いなさいまし」
トお勢は団扇を取出して文三に勧め
「しかしどうしましたと」
「エ、ナニサ影口がどうもうるさくッて」
「それはネ、どうせちっとは何とか言いますのサ。また何とか言ッたッていいじゃアありませんか、もしお相互に潔白なら。どうせあなた、二千年来の習慣を破るんですものヲ、多少の艱苦は免れッこはありませんワ」
「トハ思ッているようなものの、まさか影口が耳に入ると厭なものサ」
「それはそうですヨネー。こないだもネあなた、鍋が生意気におかしなことを言ッて私にからかうのですよ。それからネ私があんまりうるさくなッたから、とうてい解るまいとはおもいましたけれども試に男女交際論を説てみたのですヨ。そうしたらネ、アノなんでッて、私の言葉には漢語が雑ざるからまるっきり何を言ッたのだか解りませんて……ほんとに教育のないという者はしようのないもんですネー」
「アハハハそいつは大笑いだ……しかしおかしく思ッているのは鍋ばかりじゃアありますまい、きっと母親さんも……」
「母ですか、母はどうせ下等の人物ですから始終おかしなことを言ッちゃアからかいますのサ。それでもネ、そのたんびに私が

辱しめ辱しめしいしいしたら、あれでもちっとは恥じたとみえてネ、このごろじゃアそんなに言わなくなりましたよ」
「へーからかう、どんなことをおっしゃッて」
「アノーなんですッて、そんなに親しくするくらいならむしろあなたと……（すこしもじもじして言かねて）結婚してしまえッて……」
ト聞くと等しく文三は駭然としてお勢の顔を目守る。されどこなたは平気の躰で
「ですがネ、教育のない者ばかりを責めるわけにもいけませんヨネー。私の朋友なんぞは、教育のあるというほどありゃアしませんがネ、それでもマア普通の教育は享けているんですよ、それでいてあなた、西洋主義の解るものは、二十五人のうちにたった四人しかないの。その四人もネ、塾にいるうちだけで、ほかへ出てからはネ、口ほどにもなく両親に圧制せられて、みんなお嫁に往ッたりお婿を取ッたりしてしまいましたの。だから今までこんなことを言ッてるものは私ばッかりだとおもうと、何だか心細ッて心細ッてなりません。でしたがネ、このごろはあなたという親友ができたから、アノー大変気丈夫になりましたわ」
文三はチョイと一礼して
「お世辞にもしろ嬉しい」
「アラお世辞じゃアありませんよ、真実ですよ」
「真実ならなお嬉しいが、しかし私にゃアあなたと親友の交際はとうていできない」
「オヤなぜですエ。なぜ親友の交際ができませんエ」
「なぜといえば、私にはあなたが解からず、またあなたには私が解らないから、どうも親友の交際は……」
「そうですか。それでも私にはあなたはよく解ッているつもりですよ。あなたの学識があッて、品行が方正で、親に孝行で

……」
「だからあなたには私が解らないというのです。あなたは私を親に孝行だとおっしゃるけれども、孝行じゃアありません。私には……親より……大切な者があります……」
ト吃ながら言ッて文三はさし俯向いてしまう。お勢は不思議そうに文三の容子を眺めながら
「親より大切な者……親より……大切な……者……親より大切な者は私にもありますワ」
文三はうな垂れた頸を振揚げて
「エ、あなたにもありますと」
「ハアありますワ」
「誰……誰れが」
「人じゃアないの、アノ真理」
「真理」
ト文三は慄然と胴震をして唇を喰いしめたまましばらく無言、ややあッてにわかに喟然として歎息して
「アアあなたは清浄なものだ潔白なものだ……親より大切なものは真理……アア潔白なものだ……しかし感情というものはじつに妙なものだナ、人を愚にしたり、人を泣かせたり笑わせたり、人をあえだり揉だりして玩弄する。玩弄されるとうすうす気がつきながらそれを制することができない。アア自分ながら……」
トすこし考えて、ややありて熱気となり
「ダガ思いきれない……どうあッても思いきれない……お勢さん、あなたは御自分が潔白だからこんなことを言ッてもお解りがないかもしれんが、私には真理よりか……真理よりか大切な者があります。去年の暮からまる半歳、その者のために感情を支配せられて、寝ても寤めても忘ればこそ、死ぬより辛い

おもいをしていても、先ではすこしも汲んでくれない。むしろ強顔なくされたならば、また思いきりようもあろうけれども……」

トすこし声をかすませて

「なまじい力におもうの親友だのといわれてみれば私は……どうも……どうあッても思い……」

「アラ月が……まるで竹の中から出るようですよ、ちょっとごらんなさいヨ」

座の一隅に栽えこんだ十竿ばかりの繊竹の、葉を分けて出る月のすずしさ。[2]月夜見の神の力の測りなくて、断雲一片の翳だもない、蒼空一面にてりわたる清光素色、ただ亭々皎々として雫も滴たるばかり。初は隣家の隔ての竹垣に遮られて庭を半より這初め、中ごろは縁側へ上ッて座舗へ這いこみ、稗蒔の水に流れては[3]金瀲灩、簷馬の玻璃に透りては[4]玉玲瓏、座賞の人に影を添えて孤灯一穂の光を奪い、ついに間の壁へ這上る。涼風一陣吹到るごとに、ませ籬によろぼいかかる夕顔の影法師が婆娑として舞い出し、さわ百合の葉末にすがる露の珠が、たちまち螢となッて飛迷う。草花立樹の風に揉まれる音の颯々とするにつれて、しばしは人の心も騒ぎたつとも、須臾にして風が吹きやめば、またあたりひっそとなって、軒の下草に集く虫の音のみ独り高く聞える。眼に見る景色はあわれにおもしろい。とはいえ心にものある両人の者の眼には止まらず、ただお勢が口ばかりで

「アアいいこと」

トいって何ゆえともなくにっこりと笑い、仰向いて月に觀惚れる風をする。その半面を文三が窃むがごとく眺めやれば、眼鼻口の美しさはつねに異ッたこともないが、月の光を受けてすこし蒼味を帯んだ瓜実顔に、ほつれかかッたいたずら髪、二筋三筋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com